

浅田氏が第五章であげているような共通の特徴がみられるためだけではない。むしろ農民の経済的・政治的成長は、第一大戦前の闘争や植民政策の違いなどとも関連して、各植民地ごとに相当なひらきをしめすにもかかわらず、日本帝国主義の植民地における農村政策に対し、同時に大きな打撃をあたえ、そのいずれをも帝国主義の安定した拠点として確立することを許さなかったためである。たしかに日本帝国主義は各植民地農民の自主的な発展の可能性に対し、恐るべき破壊作用をおよぼしたが、それはこのような闘争に規定され、制約されてなされたものであり、そのことがこの破壊作用の特徴を決定したのである。

さらに、各植民地の農民が、もし別々の帝国主義に支配されていたならば、とうてい達成できなかったであろうような成長を、日本帝国主義という共通の敵と対決し、相互に支援し合い、経験を交流し、日本人民の闘争とも相互に影響を与えあうなかで、なしとげたのである。つまり、各植民地の運動はそれぞれ独自の途をたどって発展したにもかかわらず、客観的には、日本帝国主義を葬り去るための、一体となった革命的力量として立ちあらわれたのである。

このような過程を、世界史的規模での帝国主義の崩壊過程の重要な一環として、法則的に握把することこそ、浅田氏の労作が切り開いた世界を、より豊かな歴史像として定着させる途なのではなかろうか。

【佐々木隆爾】

V. パーロ

『不安定な経済』

Victor Perlo, *The Unstable Economy: Booms and Recessions in the U. S. since 1945*, New York, International Publishers, 1973, 238 p.

アメリカ合衆国における1969-1970年の景気後退はEstablishment economistsにとってはショックだったに違いない。そもそも戦後4回の景気後退は戦前に比べておしなべてマイルドで持続期間も短かったし、何よりもまず61年初頭に始まった拡張が、途中66-7年にミニ・リセッションとして設備投資の低下をみたにせよ、しかも実質GNPの低下をみることなく、足かけ9年、約100カ月も持続し、ために、「1960年代半ばまでには[景気循環論の講義が]大学のカリキュラムからほとんど

消え失せ」(p. 7)るまでになっていた。ところが、このたびの5回目の後退に際しては、例えば工業生産は戦後初めて後退開始後30カ月以上経ってもその前のピークを回復できなかったばかりでなく、株価が68年12月から70年5月までに30%も暴落したり、ペン・セントラルとかロッキードとかいった巨大企業があるいは実際に破産するか、あるいは政府の補助金によってかろうじて破産をまぬがれるという事件がおこったりしたことに象徴されるように、これも初めて後退が本格的な金融恐慌の様相を呈するにいたった。この後退がかれらにとってショックだったに違いないという所以である。だが、マルクス経済学者にとってはそれはさして驚くにあたらない。景気後退=経済恐慌とは資本主義的搾取=剰余価値生産に内在する生産と消費との矛盾に由来する過剰生産恐慌として把握されるとすれば、恐慌の窮極の根拠としてのこの矛盾がとり除かれな限り、これまでと同様これからも——たとえばマルクス経済学者は「恐慌の到来を歓喜する」ものではない(p. 208)としても——恐慌は発生するだろう。実にinstabilityとは資本主義的生産にとって必然的な性格なのであって、以下この点をアメリカ合衆国について解明しよう。——おおむね以上が序論にあらわれたパーロの本書執筆の意図である。そしてこうした意図によって本書の2重の性格が規定される。

本書は大きく4つの部分に分けられる。経済過程における諸矛盾の累積を分析する第1の部分(II-VII章)では、生産と消費の矛盾の増大による過剰生産恐慌の成熟、信用の過度膨脹、銀行における預貸率の上昇と企業における流動性の低下による金融恐慌発生条件の成熟、そしてインフレーションによる諸不安定要因の促進を明らかにして、「内的な矛盾の増大は、ある点で、真にきびしい世界金融恐慌および過剰生産恐慌の可能性とともに、合衆国および世界資本主義の経済成長率の顕著な、ひょっとすると長期にわたる鈍化をもたらすだろう。腐朽化しつつある体制のインフレ熱を冷やすためにはこれらのことが必要であることが判明するだろう」(p. 113)と結論する。第2の部分(VIII-X章)は以上のような経済過程における不安定要因に対応する政府政策と経済の軍事化とを分析し、政府政策の階級的制約がそれを真の反循環政策たらしめることを妨げ、軍事化はそれはそれでまた軍事支出の変動によって却って不安定要因となると同時に技術開発の奇型化と財政負担の増大とによって停滞要因のひとつになっているとする。合衆国経済の対外関係と世界経済とを分析する第3の部分(XI-XIII章)は、不均等発展によるブレトン・ウッズ体制の崩壊、合衆国国際収

支の悪化とドル危機、世界景気循環の同時化への展望と全般的危機の深化が論じられ、そして最後のXIII章でかかる不安定な経済から脱却するためのマルクス主義的対案として国民経済計画が提起される。以上のように本書は、一面では、戦後の合衆国内外をめぐる複雑な経済事象を全体として不安定化の増大傾向という視角にひきしぼって整理し、その限りにおいて、「現在の合衆国経済についてのわれわれの理解にきわめて価値ある貢献と一層の仕上げのための基礎とをなしている」(Hyman Lumer の書評, *Political Affairs*, Jan. 1974, p. 64) といっ

てよい。

しかし他面では、戦後アメリカ資本主義における諸現象の展開のうちにただ不安定要因とその増大のみをみるというこのようなアプローチは本書に著しい理論的消極性を与えている。なぜか。諸現象の「不安定性」への単なる還元は、結局は恐慌の窮極の根拠としての基本的な諸矛盾やもっと抽象的な商品生産に特有な無政府性の再確認に終らざるをえず、そうなればそれは、戦後資本主義もまた資本主義的商品生産であることに変わりはないという主張に帰着する。これを理論的消極性というわけは、この種のアプローチでは、戦後資本主義経済を例えば両大戦間におけるそれと区別し戦後資本主義を戦後資本主義たらしめている「種差」は何かという問題の理論的説明が少くとも軽視され、ために分析者とその対象との関係は分析終了後もその開始時と同様ただ不安定性という一語で結ばれているにすぎないからである。だが、「現存するものの肯定的理解のうちに同時にその否定の、その必然的崩壊の理解をも含む」というマルクスの方法は、ひとが対象をラディカルに否定しうるためには、まずもって当の対象の「存在の理性」を肯定的、積極的に把握しなければならないことを要求している。

もとより、本書が例えば恐慌や景気循環の形態変化といった戦後資本主義に生じた変化＝種差を全く意識していないというのはまちがいである。しかし、『不安定な経済』という書名が当然に要求する集中的テーマとしてのこの景気循環論において本書の理論的消極性が最も顕著に現われている。本書で景気循環の形態変化が論じられるのは上に分類した第2の部分、いわば「国家独占資本主義論」の部分においてであるが、その場合、そこでの叙述は経済的基礎過程を論じた第1の部分との関連な

しにおこなわれる。少くとも第1の部分と第2の部分との緊張関係はない。そしてそうなるのはなぜかといえ、第1の部分でおこなわれているのが『資本論』第III巻第15章の引用とそのパーロによる理解にもとづく統計的検証であって、つまり第1の部分で提出される理論的道具立ての水準は「資本一般」を一步も出ていないからである。実際、マルクスの恐慌規定を独占資本主義のフレームワークにまで具体化させようとする意識さえそこにはみられない。したがって、「国独資」部分での形態変化の分析は経済学的な媒介なしの宙に浮いた叙述の感をまぬがれないのである。他方、第V章「利潤循環」での分析は、本書の恐慌の形態変化に対する認識がどの程度本格的なものを疑わせる。すなわちここでは、1969-70年恐慌に際してまさにマルクスが分析した通りの仕方・様式において過剰資本の価値破壊を通じて利潤率の回復が達成されたかに説かれている。確かに69-70年恐慌は、株価の暴落やベン・セントラルのような巨大企業の倒産が生じたという点で、戦後の諸恐慌の中では古典的恐慌現象に最も近似した恐慌だったといってもよいかもしれない。しかし、そのことを根拠にマルクスのおこなった理論的説明は依然として貫徹していると指摘するだけですませられるだろうか。ここで注意すべきは、第1にマルクスのみているのは物価の暴落に発する利潤率の暴力的な圧縮と資本価値の破壊だったのに対し、パーロ自身が述べているように69-70年恐慌に際して物価は下がるどころか逆に「急激な上昇」(p. 8, 強調はパーロ)をみせたというのが事実であること、第2に、確かにいくつかの巨大企業を含めて倒産がひろがったけれども圧倒的多数の独占体については倒産など話にならず、したがって倒産形態を通しての資本価値破壊が国民経済全体に回復効果を与えたとはとうてい考えられないことである。現代の現実にマルクスの引用文を何とかしてあてはめようとしても、それはひいきの引倒しに終るのが関の山である。

以上のように本書は、戦後資本主義経済の安定性の謳歌に対するひとつの批判として、あるいは現代アメリカ経済における不安定諸要因のひとつの啓蒙的説明としてそれなりの価値を有する反面、そのアプローチに固有の理論的消極性が逆に本書の貢献を削減している。

【平井規之】